

これで勝負!

大消費地にいどむ

首都圏農業

■ 147 □

加須市 騎西いちじく組合

【埼玉】加須市の騎西いちじく組合（若山和代表）が作る甘く大きなイチジクは、市を代表する物産品の「かぞブランド」に認定された逸品だ。

同組合の設立は約40年前にさかのぼる。陸田の転作物としてイチジクが導入され、数人の先駆者が産地の視察や研修を重ねて新組合を作り、皆で技術を磨いた。おいし

いイチジクを作るための努力を惜しむ者はいなかった。その品質の高さが認められ、いつしか市を代表する産品となった。

昨年は36トを県内市場に出荷。出荷時期になると連日のように組合員同士で生育状況などの情報交換が行われるという。



努力重ねたブランドの逸品

品質向上をめざした組合設立時の思いは、今も皆の心に根付いている。また、同組合は次世代のイチジク生産者育成に

も力を入れている。新規就農者向けの講習もその一つ。若山和一さん(77)と写真(77)と副組合長が中心となって受講者の畑に出向き、土づくりから収穫まで指導する。地元土地や気候の中で磨いてきた技術だからこそ説得力がある。若山さんは「何でも遠慮せず聞きに来てほしい。顔や現場を直接見るのが一番いい」と話す。同組合では市民に地元イチジクのおいしさを伝えることも大切に行っている。同組合がイベント時に販売する「いちじく饅頭」は特に人気で、多いときは1千個ほどが売れるという。イチジクの入った餡のプチプチとした絶妙な食感。新芽を混ぜた生地からはイチジクの香りが広がる。イチジクの魅力を堪能できる商品に仕上げている。若山さんは今後について、「若手農業者が順調に成長して後継者になってほしい。一人前に育てることが私たちの任務だから」と優しい笑顔で語った。